

果 樹 の 生 育 概 況

令和 7 年 7 月 1 日現在
福島県農業総合センター果樹研究所

1 気象概況

6 月 1 ～ 6 半旬の平均気温は 23.2℃で、平年より 3.2℃高かった。また、この期間の降水量は 73.5mm で平年比 61%、日照時間は 225hr で平年比 127%であった（表 1）。

表 1 半旬別気象表（果樹研究所）

月	半旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
6	1	18.3	18.9	-0.6	24.2	25.0	-0.8	12.6	13.3	-0.7	17.5	12.5	140.0	40.1	38.1	105.2
	2	21.9	19.3	+2.6	29.4	24.8	+4.6	15.4	14.6	+0.8	2.5	10.7	23.4	36.0	33.0	109.1
	3	21.0	19.7	+1.3	26.3	25.2	+1.1	16.1	15.2	+0.9	34.0	15.4	220.8	37.0	32.1	115.3
	4	26.5	20.5	+6.0	33.1	25.6	+7.5	20.9	16.3	+4.6	0.0	20.5	0.0	47.1	27.1	173.8
	5	25.7	20.3	+5.4	30.8	24.8	+6.0	22.0	16.5	+5.5	12.5	22.7	55.1	22.0	23.3	94.4
	6	25.8	20.9	+4.9	32.3	25.5	+6.8	19.3	17.4	+1.9	7.0	38.9	18.0	43.1	24.3	177.4
平均・合計		23.2	20.0	+3.2	29.3	25.2	+4.1	17.7	15.5	+2.2	73.5	120.7	60.9	225.3	177.9	126.6

2 土壌の水分状況

6 月 30 日時点の土壌水分（pF 値：果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水）は、深さ 40cm で 2.9、深さ 60cm で 2.9 となっており、乾燥状態である（図 1）。
（深さ 20cm は 6 月 21～30 日までデータ欠損）

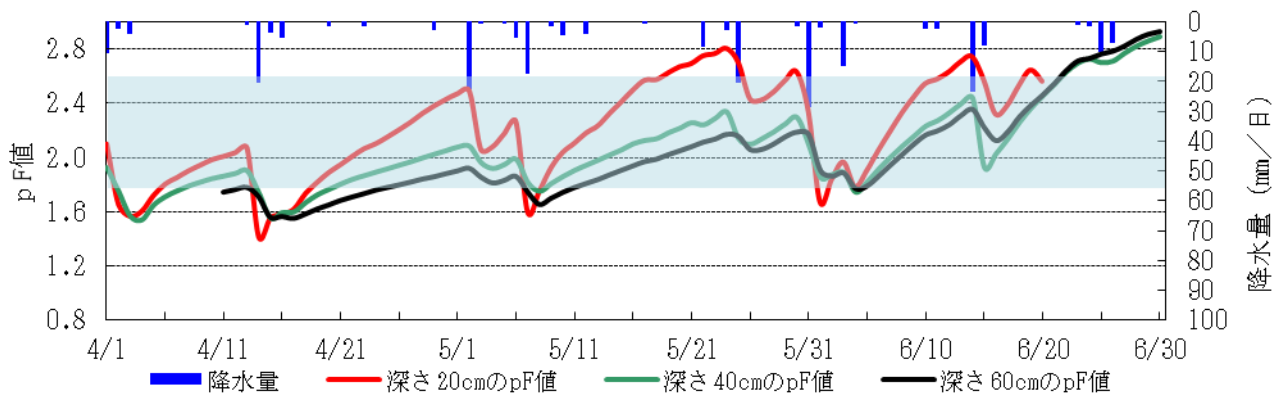


図 1 土壌 pF 値の推移（果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水）

図中の網掛け部は、適湿の範囲（pF1.8-2.6）を示す

3 生育状況

(1) モモ

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が 52.4mm で平年比 108%、側径が 54.7mm で平年比 115% と平年より大きい。「ゆうぞら」は縦径が 50.5mm で平年比 106%、側径が 46.1mm で平年比 110% と平年より大きい。満開後日数で比較すると、両品種ともに平年よりやや大きい（図 2）。

イ 新梢生長

満開後 70 日における「あかつき」の新梢長は 15.6cm（平年比 119%）で平年より長く、展葉数は 16.4 枚（平年比 107%）で平年よりやや多く、葉色は 40.9（平年比 9

6%) で平年並であった。「ゆうぞら」は、新梢長が 22.4cm (平年比 157%) でかなり長く、展葉数は 18.4 枚 (平年比 124%) でかなり多く、葉色は 40.5 (平年比 94%) で平年よりやや少なかった。新梢停止率は「あかつき」が 72.5% (平年比 95%) で平年並、「ゆうぞら」が 50.0% (平年比 64%) で平年よりかなり低い (表 2)。

ウ 核障害の発生

満開後 75 日における「あかつき」の核障害発生率は、核頂部亀裂は認められず、縫合面の割裂が 25% と概ね平年に近い状態である (表 3)。

エ 収穫状況

本年の「はつひめ」の収穫始めは 6 月 30 日で平年より 6 日早く、昨年より 2 日遅かった (表 4)。

オ 発育予測

DVR モデルによる「あかつき」の発育予測について、気象庁の気象予報を用いた場合は、本年の収穫開始日は 7 月 27 日で平年より 4 日早く、収穫盛期日は 7 月 31 日で平年より 4 日早いと予測される (表 5)。

なお、この時期の生育は直前の気温に左右され、今後の気温の推移により、大きく変動する場合があるので注意する。

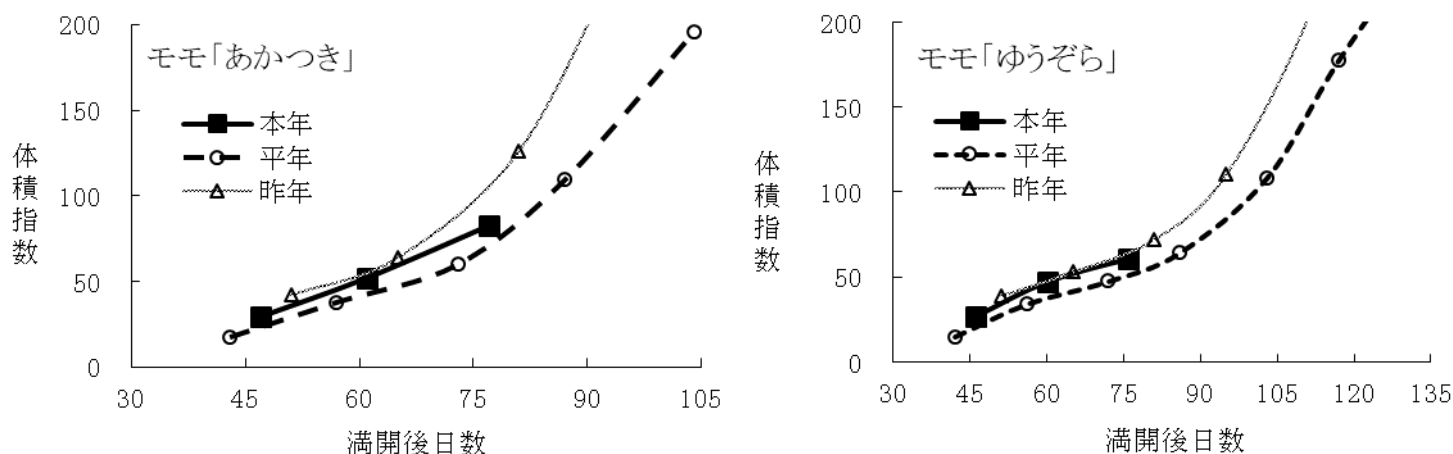


図 2 モモの果実肥大

表 2 モモの新梢伸長 (満開後 70 日調査)

品種	新梢長 (cm)			展葉数			葉色 (SPAD)			新梢停止率 (%)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
あかつき	15.6	13.1	119	16.4	15.3	107	40.9	42.8	96	72.5	76.6	95
ゆうぞら	22.4	14.3	157	18.4	14.8	124	40.5	43.2	94	50.0	78.4	64

注) 平年値は 1996～2020 年までの平均値。

表 3 モモの核障害発生状況 (品種：あかつき)

年	満開後日数	30日	45日	50日	55日	60日	65日	70日	75日	85日	95日	収穫果
2025	核頂部亀裂	30.0	40.0	30.0	20.0	25.0	10.0	20.0	0.0	—	—	—
	縫合面割裂	0.0	0.0	0.0	0.0	15.0	15.0	40.0	25.0	—	—	—
2000 ～2020	核頂部亀裂	35.1	37.1	45.5	51.9	53.3	50.7	49.1	42.9	48.1	49.3	48.8
	縫合面割裂	0.0	0.0	1.7	2.4	11.4	22.1	23.0	21.9	32.6	36.8	24.6

注) 平年値は 2001～2020 年までの平均値。

表 4 モモの収穫状況

品種	収穫始め			収穫盛り			収穫終わり			果実重 (g)			糖度 (° Brix)		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
はつひめ	6/30	7/6	6/28	未	7/9	7/2	未	7/13	7/4	未	264	303	未	11.8	12.7
日川白鳳	未	7/13	7/1	未	7/16	7/3	未	7/20	7/4	未	236	211	未	11.0	12.8
暁 星	未	7/21	7/8	未	7/25	7/10	未	7/29	7/11	未	221	211	未	13.0	14.0
ふくあかり	未	7/21	7/12	未	7/27	7/15	未	7/31	7/16	未	266	306	未	13.0	12.8
あかつき	未	7/31	7/19	未	8/4	7/22	未	8/9	7/29	未	269	343	未	13.0	13.2

注) 平年は、1991 年～2020 年（「はつひめ」「ふくあかり」は 2009 年～2020 年）の平均値。

表 5 モモ「あかつき」の発育予測

[発育速度 (DVR) モデルによる発育予測：6 月 30 日現在]

	観測日		今後の気温経過			
	昨 年	平 年	気象予報	平年並	2℃高い	2℃低い
収 穫 開 始 日	7月19日	7月31日	7月27日	7月27日	7月27日	7月27日
収 穫 盛 期 日	7月22日	8月4日	7月31日	7月31日	7月31日	7月31日

注 1) 平年は 1991～2020 年の平均値。

注 2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2 週間気温予報及び 1 ヶ月予報気温（3～4 週目の平均気温）を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注 3) モモ「あかつき」の発育予測は 1～2 日の誤差があることに留意する。

(2) ナシ

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が 33.9mm で平年比 100%、横径が 42.1mm で平年比 105%と平年並である。「豊水」は縦径が 39.2mm で平年比 111%、横径が 44.7mm で平年比 118%と平年より大きい。満開後日数で比較すると、「幸水」は平年並、「豊水」は平年よりやや大きい（図 3）。

イ 新梢生長

満開後 70 日における「幸水」の予備枝新梢長は 110.7cm（平年比 101%）で平年並、不定芽新梢長は 104.7cm（平年比 111%）で平年より長かった。予備枝新梢の葉枚数は 30.4 枚（平年比 101%）で平年並であった。予備枝新梢伸長停止率は 34.2%、不定芽新梢伸長停止率は 64.1%である（表 6）。

満開後 70 日における「豊水」の予備枝新梢長は 108.7cm（平年比 105%）で平年よりやや長く、不定芽新梢長は 84.9cm（平年比 97%）で平年並であった。予備枝新梢の葉枚数は 30.0 枚（平年比 107%）で平年よりやや多かった。予備枝新梢伸長停止率は 44.2%、不定芽新梢伸長停止率は 78.7%である（表 6）。

ウ 生育予測

7 月 1 日現在の DVR モデルによる「幸水」の裂果期予測は、7 月 2 日頃で平年より 12 日早い見込みである。7 月 1 日現在では確認されていない。

また、DVR モデルによる収穫盛期の予測は、8 月 23 日頃で平年より 6 日早い見込みである。

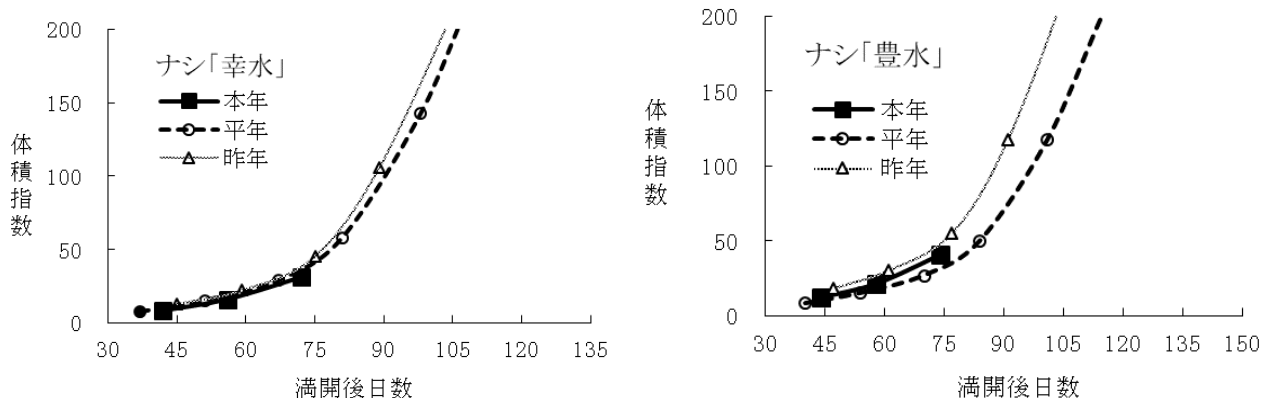


図3 ナシの果実肥大

表6 ナシの新梢生長（満開後70日）

品種	予備枝新梢長 (cm)			不定芽新梢長 (cm)			予備枝葉数 (枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	110.7	109.2	101	104.7	94.7	111	30.4	29.5	101
豊水	108.7	104.0	105	84.9	87.8	97	30.0	28.1	107

品種	予備枝新梢停止率 (%)			不定芽新梢伸長停止率 (%)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	34.2	56.0	61	64.1	75.7	85
豊水	44.2	75.1	59	78.7	80.0	98

注) 平年値: 「幸水」の新梢長は1990～2020年、葉枚数は1998～2020年、「豊水」の新梢長は1991～2020年、葉枚数は1998～2020年の平均

(3) リンゴ

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「つがる」は縦径が50.5mmで平年比99%、横径が58.5mmで平年比102%と平年並である。「ふじ」は縦径が46.8mmで平年比103%、横径が48.7mmで平年比101%と平年並である。満開後日数で比較すると、両品種ともに平年よりやや小さい(図4)。

イ 新梢生長

満開後50日における新梢長は、「つがる」が20.4cm(平年比96%)、「ふじ」が19.8cm(平年比101%)と平年並であった。新梢停止率は、「つがる」が93.3%、「ふじ」が100.0%であった(表7)。

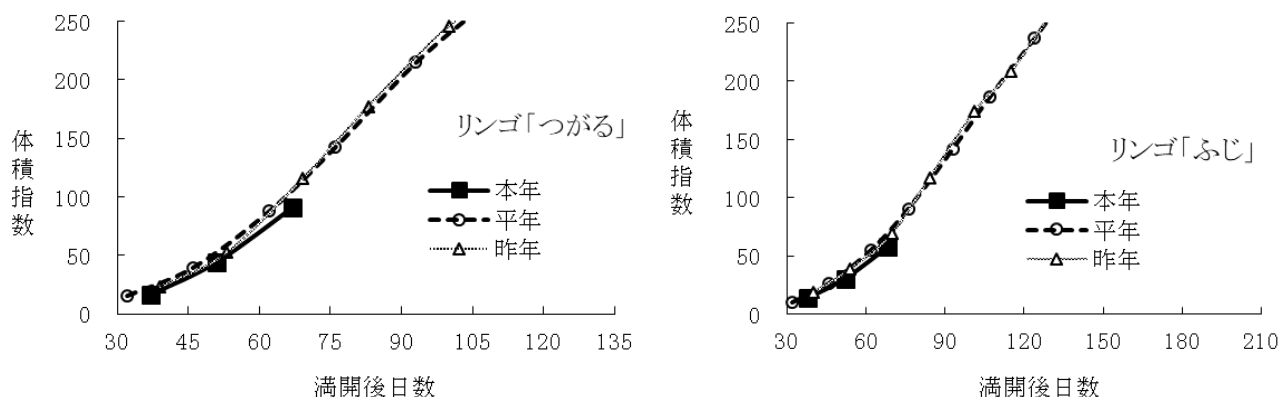


図4 リンゴの果実肥大

表7 リンゴの新梢長及び新梢停止率（満開後 50 日）

品 種	満開後 日数	新梢長 (cm)				新梢停止率 (%)	
		本年	昨年	平年	平年比 (%)	本年	昨年
つがる	20	11.3	14.7	13.1	86	6.7	25.0
	30	17.2	18.1	18.0	96	70.0	66.7
	40	19.7	19.0	20.4	97	86.7	91.7
	50	20.4	19.0	21.3	96	93.3	100.0
ふ じ	20	13.7	17.6	15.6	88	13.3	38.9
	30	18.0	19.6	18.9	95	51.7	80.6
	40	19.8	19.6	19.5	102	96.7	100.0
	50	19.8	19.8	19.7	101	100.0	100.0

注) 新梢長平年値は、1996～2020 年の平均

供試樹：「つがる」／M.26／マルハカイトウ 19 年生

「ふじ」／マルハカイトウ 22 年

(4) ブドウ

ア 新梢生長

発芽後 70 日における「巨峰」の新梢長は 129.5 cm で平年比 94%、展葉数は 17.5 枚で平年比 95%と平年並となっている（表 8）。

表 8 「巨峰」の新梢生長（発芽後 40～70 日）

発芽後 日数	新梢長 (cm)			展葉数 (枚)		
	本年	平年	平年比 (%)	本年	平年	平年比 (%)
40	69.7	60.8	115	10.5	9.3	113
50	87.4	85.4	102	12.1	12.2	99
60	87.5	114.2	77	12.0	15.4	78
70	129.5	138.1	94	17.5	18.5	95

注) 平年値は 2006～2024 年の平均

発芽後 52 日後に摘心を実施

4 栽培上の留意点

(1) 共通

ア かん水

5 月から夏期にかけて果樹園からの 1 日当たりの蒸発散量は、晴天日で 6～7 mm、曇天日で 2～3 mm、平均で 4 mm 程度であるので、1 回のかん水は 25～30mm 程度 (10 a 当たり 25～30 t) を目安とし、5～7 日間隔で実施する。保水性が劣る砂質土壌などでは、1 回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くする。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行う（地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされる）。

ウ マルチ

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努める。

(2) モモ

ア 早生品種の収穫

現在、早生品種の収穫が始まっている。核や胚に障害を持つ果実は、成熟が早まりやすい傾向にあるため、果肉の軟化に注意し、収穫が遅れないように留意する。

イ 修正摘果

硬核期が終了し、肥大不良果や変形果、核に障害をもった果実などが徐々に目立ってきている。収穫を控えた中生種の修正摘果は数回に分けて丁寧に実施するとともに、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらに注意して摘果を実施する。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」の収穫期予測では、平年より4日早い見込みである。また、核障害の発生が多い場合には、核や胚に障害を持つ果実が早熟する傾向にあるので注意が必要である。「あかつき」等中生種は今月上～中旬頃から着色期に入るため、夏季せん定、支柱立てや枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に実施する。

(3) ナシ

ア 新梢管理

「幸水」では、腋花芽着生向上を目的として新梢誘引を実施する場合、新梢生長が停止する前に予備枝誘引作業を完了する必要がある。まだ終わっていない場合は急いで作業を進めるようにする。

また、新梢誘引は樹冠内の光条件を改善するとともに、散布むらを減らし、翌春における長果枝棚付け作業の効率化なども期待できるので「幸水」以外の品種でも積極的に実施する。

イ 着果管理

仕上げ摘果はできるだけ速やかに終了させる。この際、着果過多にならないよう、単位面積当たりの着果量を確認しながら摘果作業を進める。なお、裂果が観察される時期の摘果は他の果実の裂果発生を助長するおそれがあるので控え、裂果が収束（満開後90日頃）したら修正摘果を実施する。

(4) リンゴ

ア 修正摘果

果実肥大や果形、障害の有無等の区別がつきやすい時期なので、小玉果、変形果、病虫害被害果、サビ果を中心に修正摘果を実施する。特に、霜害を受けて摘果を遅らせていた園地では、仕上げ摘果実施後でも新梢の伸びや葉数に注意し、適正着果となるよう修正摘果を実施する。

イ 枝吊り・支柱立て

果実の肥大にともない枝が下垂するので、樹冠内部の受光条件の改善、枝折れ防止及び防除効果の向上のため支柱立て及び枝吊りを実施する。なお、高温条件下では、果実に直射日光が当たると日焼け果が発生しやすくなるため、果実が果そう葉で隠れるようにするなど着果位置に留意する。

(5) ブドウ

ア 着房数管理

着房過多は、糖度上昇の遅れや赤熟れ果の発生の要因となる。また、耐寒性の低下や翌年の発芽不良、樹勢の低下などにも影響することから、ベレーズン(水回り)期までに着房数の見直しを行い、適正着果量に調整する。最終着房数の目安は「巨峰」では 3.3m^2 当たり9～10房、「高尾」では10～11房とし、樹勢や今後の天候の推移をみながら適宜調整を行う。特に、夏季に低温・日照不足が続く場合には、着房数の制限が必要である。

イ 袋かけ・カサかけ

摘粒作業が終わりしだい、薬剤散布を行い袋かけ・カサかけを行う。この作業は病虫害防除や果実の汚れ防止、日焼け防止のために重要な作業である。また、使用した枚数を把握し着果量調整の目安とする。棚面が明るい部分では果房に直接強い日光が当たり、日焼けなどの高温障害を引き起こすため、遮光率が高いカサの利用や直射日

光が当たらないように新梢の誘引を見直す。

5 病害虫防除上の留意点

(1) 病害

ア リンゴ褐斑病

6 月中下旬の本病の発生は場割合は平年より高い状況にあり（令和 7 年 6 月 30 日付け病害虫防除情報）、梅雨期は本病の二次感染期となるため、今後発生が急拡大するおそれがある。本病の発生が既に認められる場合は、10 日間隔での薬剤防除を徹底し、感染拡大を防止する。

イ リンゴ輪紋病、炭疽病

輪紋病または炭疽病の発生が多い園地では、両病害に効果がある薬剤を十分量散布する。なお、炭疽病の発生を抑制するために、園地周辺のニセアカシア、シナノグルミ、イタチハギなどの伝染源植物を除去する。

ウ モモせん孔細菌病

梅雨期は二次感染により発病が急増するおそれがあるため、引き続き注意が必要である。晩生種で本病の発生が多い場合は、7 月中旬頃にマイコシールド 2,000 倍を散布する。なお、本剤を使用する場合は、使用時期（収穫 21 日前まで）、成分回数（オキシテトラサイクリン、散布、5 回）に注意し、農薬使用基準を遵守する。

エ モモホモプシス腐敗病、灰星病

梅雨期は灰星病及びホモプシス腐敗病の重点防除時期であるため、7 月上旬及び中旬頃に両病害に効果の高い薬剤を十分量散布する。薬剤防除は使用時期（収穫前日数）に十分注意して実施する。

オ ナシ黒星病、輪紋病

幸水では黒星病の果実感受性が高まる時期（満開後 50 日～90 日頃）であるため、引き続き注意が必要である。罹病部位は見つけしだい除去して適切に処分するとともに、本病や輪紋病の多発が予想される場合は、7 月上旬及び中旬頃に両病害に効果がある殺菌剤を十分量散布する。

カ ブドウ晩腐病

7 月上旬の袋かけ前にはストロビードライフロアブル 2,000 倍を散布し、散布後速やかに袋かけを行い、本病の感染を防止する。

(2) 虫害

ア モモハモグリガ

第 3 世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が 2℃ 高く推移した場合、7 月 3 半旬頃と予測され、第 4 世代の防除適期は 7 月 4 半旬頃と推定される（表 9）。

本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意する。

イ ナシヒメシンクイ

第 2 世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が 2℃ 高く推移した場合、7 月 3 半旬頃と予測され、第 3 世代の防除適期は 7 月 4 半旬頃と推定される（表 9）。

本種はモモ等の核果類の新梢伸長が停止するとナシ果実への寄生が増加する。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底する。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守する。

ウ モモノゴマダラノメイガ

被害が発生しているモモ園では、他のシンクイムシ類との同時防除も含め、10 日間隔で 2～3 回防除を行う。被害果実は見つけしだい摘除し、5 日間以上水漬けにするか、土中深く埋める。

エ ナシマルカイガラムシ

ナシマルカイガラムシ第 2 世代のふ化開始は、今後の気温が 2℃ 高く推移した場合、7 月 4 半旬頃と予測され、ふ化盛期は 7 月 6 半旬頃と推定される（表 9）。

カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除する。

オ ハダニ類

高温期は増殖が速いのでハダニ類の発生状況をよく確認し、要防除水準（1 葉当たり雌成虫 1 頭以上）の密度になったら速やかに防除を行う。

カ カメムシ類

病害虫防除所のフェロモントラップ調査におけるカメムシ類の越冬世代の誘殺数は、平年より多い傾向にある（6 月 13 日付け令和 7 年度病害虫防除情報）。飛び込みをよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行う。

表 9 果樹研究所における防除時期の推定（令和 7 年 6 月 30 日現在）

今後の気温予測	モモハモグリガ			
	第 2 世代 誘殺盛期	第 3 世代 防除適期	第 3 世代 誘殺盛期	第 4 世代 防除適期
2℃高い	6 月 25 日	6 月 29 日	7 月 14 日	7 月 18 日
平年並	6 月 25 日	6 月 29 日	7 月 17 日	7 月 21 日
2℃低い	6 月 25 日	6 月 29 日	7 月 18 日	7 月 23 日

起算日：モモハモグリガ第 2 世代誘殺盛期 6 月 2 日（予測値）（演算方法は三角法）

今後の気温予測	ナシヒメシンクイ		ナシマルカイガラムシ	
	第 2 世代 誘殺盛期	第 3 世代 防除適期	第 2 世代 ふ化開始	第 2 世代 ふ化盛期
2℃高い	7 月 12 日	7 月 19 日	7 月 20 日	7 月 28 日
平年並	7 月 15 日	7 月 23 日	7 月 24 日	8 月 2 日
2℃低い	7 月 17 日	7 月 26 日	7 月 26 日	8 月 6 日

起算日：ナシヒメシンクイ第 1 世代誘殺盛期 6 月 17 日（予測値）
ナシマルカイガラムシ 3 月 1 日（演算方法は三角法）